

健康文化

癌治療医の肺癌体験記

松田 忠義

はじめに

終戦前後の苦難を乗り越え、1950年医師免許証をもらって、50年間放射線科の勤務医として過ごした。最初は肺結核の診断を、後の40年間は悪性腫瘍の診断と治療の診療と研究に精励した¹⁾。

医師の仕事を終えて1年後に肺癌の治療を受けた。

現在、肺癌は男性で最も多い癌であり、医療の進歩で診断と治療は改善しているが5年生存率は1割から2割であり、進行癌の予後は更に悪い。

肺癌の6年間の闘病記を体験記を基にまとめた。

一章 肺癌の手術を受ける

2001年10月、咳と痰が続き去痰剤と鎮咳剤で軽くなるが、夜間の咳き込みがひどく胸部痛を伴い不安が募る。11月9日、高血圧の定期診察で胸部レントゲン写真で右肺門部に腫瘤影がみられ、呼吸器内科の指示で撮影したCTで肺癌と診断され、入院を予約して帰宅した。不安で帰宅を待つ家内に一部始終話した。自分でも信じられない程落ち着いた気持ちで検査を受け診断結果を受け止めた。

癌の確定と転移の有無を入院して検査を受けた。気管支鏡検査、脳のMRI、骨シンチ、その他の検査と更に心臓超音波検査、糖尿病等の手術前検査を受けた。検査の結果を詳しく説明し、外科医との相談で根治手術が可能と説明を受けた時の喜びと安堵感は筆に尽くせない。肺癌の診断がついた時点で根治手術ができるのは2割—3割と承知していたからである。内科の主治医 Dr. T.O. の説明に説得力と愛情が籠る。信頼と尊敬できる先生に巡り合った事は幸せであった。

外科病室に移り、主治医 Dr. Y.N. から手術予定の説明を受けた。11月26日、3時間の予定で右中葉切除とリンパ節廓清を行う。ICUに一泊し病棟に戻る。2回に亘る懇切な説明であった。手術前、訪問を受けた麻酔科部長と、手術主任看護師の手術前後の懇切丁寧な言葉は今でも心に残っている。誠実な愛情が医療の原点と痛感する。

11月26日は清々しい秋晴れの朝であった。洗面の後、正信偈を声明し念仏者

の感謝で迎えた。全身麻酔の後は夢の間に過ぎ ICU で一夜を過ごし、手術の経過と内容の説明を受けた。手術の結果はⅢA期の腺癌であった。

手術後は苦しみが続いたが一日一日が回復の希望で乗り切った。日々の状況を綴った日記から抜粋する。

主治医は深呼吸と痰を出す事、歩く事が回復の基本であると、繰り返し勧めてくれた。術後1日：胸痛と血痰の喀出に苦しむ。術後2日：放屁と自力排尿に安心。病棟の廊下を2周歩く。その後、気管支鏡検査、肺機能検査を受け、手術後12日退院。

小括：肺癌の告知から手術後退院までの心の動揺と不安は複雑であった。癌の専門医でありながら早期の診断ではなく甚だ残念であるが、中葉切除とリンパ節廓清が成功し順調に回復しつつある事は感謝に堪えない。

二章 肺炎を併発し膿胸に進展する

手術を終えて20日間は咳と痰、胸痛が続いたが順調に回復の経過を辿り、健康で新年を迎え喜んでいた。その頃から咳がひどくなり1月16日放射線科を受診し、白血球数 $12,000/\text{mm}^3$ 、CRP40、胸部写真で右肺に広範な陰影を認め、抗生剤と点滴静注を受ける。その後外科外来で治療を続けたが、症状は改善せず、1月25日入院して治療を受ける事になった。入院以来栄養剤と抗生剤を12時間連続して点滴静注を受けた。幸い、治療が奏功し1週間で白血球 $4,000/\text{mm}^3$ 、CRPも1桁に改善した。2月4日の気管支鏡検査で洗浄液に緑膿菌やウイルス等の特別な菌は無く、これまでの抗生剤を続ける事になった。心ひそかに早い回復を期待していた矢先に病状が新たな展開になった。

2月13日、胸腔ドレナージを挿入し、膿性の胸水400ccを吸引し、主治医の説明にびっくり仰天、声なしと日記に記録している。

膿胸発生から治癒に至る経過を日記から時系列で要約する。

- 1) 2月15日から21日迄：5時間かけて胸腔ドレーンから500ccで洗浄する。洗浄を重ねるにつれ、廃液が綺麗になり安心する。
- 2) 2月22日から3月5日迄：肺の表面の付着物を溶かすバリタアゼの胸腔洗浄を実施した。この洗浄で右下葉の拡張を確認し、CRP 1.2、血清アルブミン3で正常値となる。
- 3) 3月8日：胸腔ドレーン抜去を決め、クランプを外すと胸腔挿入管から膿汁が流失しドレーン除去は出来ないと判断。生食500ccとイソジンで2時間洗浄する。

- 4) 3月9日から13日迄：生食500ccとイソジン100ccを胸腔に注入し排泄を5回繰り返す。3月14日：胸水は綺麗で排泄量も正常となる。
- 5) 3月15日：胸腔ドレーンを抜去し縫合し終了した。この日を待ち侘び嬉し涙を禁じ得なかった。主治医を始めスタッフの皆さんが膿胸の治療に手間取り入院が延びた事を申し訳ないと繰り返され、私共は慎重な配慮に心からの礼を申しあげた。

小括：肺癌の手術後に肺炎を併発し膿胸に進展した2ヶ月の入院記録である。短時日で回復すると思っていた肺炎が膿胸に進展し、紆余曲折し不安と焦りに塗炭の苦しみを味わった。絶望感を克服出来たのは医師と看護師の献身的な診療につきるが、心の側面の支えになったのは真宗信者の心に響く如来の呼びかけであった²⁾。

三章 放射線治療を受ける

5月初旬の検査がすべて正常値で懸案の放射線治療を受ける事になった。両側鎖骨窩から縦隔洞を含む範囲に2Gy（グレイ：放射線の吸収線量を表す単位）ずつ25回の照射である。5月20日から31日までの15回は外来通院で治療を受けた。1回から10回までは副作用がなく治療を受けたが、3週目に入り嚥下痛が強くなり入院して残りの10回の治療を受ける事になった。入院して嚥下痛の対策として食事前のアルカロイドの服用、きざみ食事とインダシン坐薬の挿入などで食事が楽になった。5回の治療が終わった頃から再び食事が沁みるようになった。主任看護師と相談しきざし食にころもかけの食事にかえると共に朝6時と夕方5時にインダシン坐薬を挿入し様子を見る事にした。幸い嚥下痛がなく食事を全部取り、放射線治療を完了し退院した。

小括：放射線治療を専門にした自分にとって、今回選定した治療を完遂する事は癌の再発防止に不可欠と信じていた。放射線食道炎に伴う嚥下痛、粘調な唾液の喀出困難は想像以上にきつかった。食事の献立と鎮痛剤投与の調整で治療を完遂出来た。放射線治療の看護の重要さを痛感した入院であった。

四章 癌治療後の経過

肺癌の手術後の健康状態を肺癌の手術を受けた2001年11月26日を起点として6年間に29編の記録に纏めている。

手術後1年を過ぎて

今年は78年の生涯で最も大きい出来事が続いた年であった。健康状態を2002年12月30日の日記から抜粋する。

消耗した体力が毎日の散歩で徐々に回復している。体の痩せは改善せず発病前の面影はない。手術後続いた右胸部の痛みは和らいでいるが、インダシン坐薬を続けている。起床時の咳と痰に苦勞している。癌の再発の心配は離れる事が無い。揺れ動く心の清涼剤として8月14日の日記を記録する。

・・・放射線治療を終えて50日が過ぎた。自転車で15分の石神井公園の散歩を始めた。夕暮れ時、三宝寺池と樹木の間を吹きぬける風は実に爽やかである。池辺に腰をおろし、沈み行く太陽を眺めながら蝸と蟬の澄み渡る鳴き声に、しばし病気の事を忘れ至福の時を過ごしている。

手術後2年を過ぎて

手術からの2年間は検査と治療が多く、その中から3つの記録を抜粋する。

(その1) 1月28日と11月18日の各種の画像検査と血液検査で癌の再発と転移のない説明を受けた。精密検査を受け、結果が判るまでの心の動揺は複雑であり、結果が無事であった時の喜びと安堵は言葉に尽くせない。

(その2) 6月5日と6日、山形中学卒業60周年記念の出羽三山旅行に参加した。好天に恵まれ山並みの緑は素晴らしかった。羽黒山神社と湯殿山神社は階段が多く山登りは大変であった。疲れて体がふらついていたが全てを完遂した。この度の旅行は心身の回復の大きな自信になった。

(その3) 健康状態で特筆する事は、本年7月以降インダシン坐薬の使用をとりやめ、心配していた依存症から脱却出来たことである。肺癌の手術後の胸部と背部の頑固な痛みは患者の最大の苦痛であり、鎮痛剤の開放は言い尽くしがたく、自制心の賜物と自負したい。

手術後3年の峠を越して

2003年11月25日の精密検査で癌の再発と転移の無いことが確認された。癌治療の一つの目安とされる3年を無事に越した事を主治医と共に喜んだ。然し、進行癌の私の場合まだまだ油断は出来ないと気持ちを引き締めていた。精密検査の朗報に気を良くした二つの記録を留める。

(その1) 6月14日から17日まで、淡路島で開催の国際ホーラムに参加した。国内と外国の友人が健康を取り戻した事を喜んでくれた。学術発表、懇親会、瀬戸内海遊覧などに気力と体力の回復に大きな自信となった。患者の救済と学術の開発に生涯を尽くした者の喜びを感じた旅行であった。

(その2) 毎日の散歩が落ち込む心身を励ます活力になっている。小鳥の囀りを聞きながらの公園の散歩に体力の回復を実感する。会う人毎に「血色が良い」

「太った」と言われるのが勇気付けになっている。血圧が安定し、息切れが軽くなったのは有難い。

手術後4年と5年が無難に過ぎる

手術後の1年2年は重い心を引きずっての日暮らしであった。3年の峠を越して気持ちが楽になり、この傾向は年を重ねる毎に加速した。心身の状態は克明に記録しているが、同じ事の繰り返しが多く次の稿で総括する。

手術後6年を過ごして

手術後6年目の主な出来事と健康状態を抜粋する。

(その1) 親鸞仏教センターの依頼で執筆した「真宗人として歩んだ医師の道²⁾」の論文作成に時間を掛けた。各分野の有識者と共に執筆する事に光荣と責任を感じての作業であった。異常高温が続く中の完成は大きい自信になった。

(その2) 前橋市で9月開催の24回日本ハイパーサーミア学会と京都市で10月平岡真寛先生が主催した45回日本癌治療学会に出席し、最新の学問を勉強出来た事は健康の回復を実感した。

(その3) 発病前から「歩くこと」が日暮に定着し、寒さ暑さの厳しい日でも歩かずに居られない。四季折々の散歩に大自然の美しさを堪能している様子が日記を埋めている。

色々のリスクを持った高齢者の我が身が進行癌と術後の合併症に打ち勝つ事が出来た大きい要因に「毎日1時間以上歩いた」事を確信している。

(その4) 1) 5月と11月の精密検査で癌の所見が認められず今後は1年1回の検査になった。癌の心配が遠ざかる度に年齢を重ね、体力と気力の衰えが免れない。一日一日を大切に生きる事に心掛けている。

2) 咳と痰が続いている。

3) 心房細動の診断以来、降圧剤と強心剤の服用で安定している。

4) 食欲が進まないのは年齢の所為であろうか。

(その5) 真宗会館の行事に参加して15年を過ぎた今、歎異抄、大無量寿経、正信偈の講義を毎月学んでいる。発病以来心の動揺を心の奥から支えてくれたのは真宗信者の心に響く如来の呼びかけと感謝している²⁾。

おわりに

現在、3人に1人が癌による死亡であり、年間32万人に及んでいる。其のうち5人に1人が肺癌による死亡である。高年齢化が進み癌に罹患する人が更に増加することは避けられない。

スクラップしている2003年4月の「心の痛みがわかる医療—がん体験が医者

を変えた一」の新聞記事に受けた強い衝撃が今も残っている。その内容は、がん患者の苦しみは肉体的苦痛が3割で精神的苦しみが7割である。治療に伴う副作用と後遺症の苦しみ、再発と死の恐怖を要約し、最後に癌の闘病生活を克服した医師が「大丈夫、一緒に頑張ろう」と患者に呼びかけてほしいと呼びかけている。6年間の心の軌跡をまとめた小史が癌に苦しんでおられる方々の少しでもお役にたてば幸いである。

文 献

- 1) 松田忠義：癌研究の遍歴—放射線医学とともに歩んだ43年 癌治療・今日と明日 16：1－4. 1994.
- 2) 松田忠義：真宗人として歩んだ医師の道 あんじやり. 14：24－25. 2007.

(元東京都立駒込病院副院長、多摩南部地域病院名誉顧問)